和魂伝心
Wa Kon Den Shin

日本きもの学会会報

［第10号］

発行日／平成24年5月

［日本きもの学会］
〒600-8009　京都市下京区四条通室町東入
京都産業会館５階
TEL075-211-1346　FAX075-211-0125
http://japan-kimono-association.com/

この人に聞く

植村和代氏に聞く

「日本きもの学会」副会長・帝塚山大学教授

わが国織機の成り立ちを「大和機と厩機」で研究
高級麻織物「奈良晒」の誕生のなぞ

当学会のきもの論文集「きもの学研究」第二集が近く刊行される予定です。その中の一篇を飾っていただくのが、植村和代氏です。当学会の副会長で帝塚山大学教授として、長年、染織の研究に携わってこられた研究の成果の一端をお寄せいただきました。今回の論文のテーマ「大和機と厩機」は、これまで、織物研究の陰に隠れて、日の当たることの少なかった「織機」に注目され、しかも、自給自足の麻織物とは一線を画する商品織物として登場する「奈良晒」に論及された興味深い内容となっています。ここでは、一足早く、この植村論文にまつわる周辺事情を聞いてみました。

●今回の論文では、奈良晒と大和機の研究成果が述べられていますが、これらに注目されたのはいつ頃からだったのでしょうか。

「奈良晒とは、室町末期から江戸時代初期にかけて南都奈良に興った麻織物産業です。わが国の麻織物は長い歴史を有するのですが、ほとんどが自給自足のものとして存在しました。ところが、奈良晒は、それらとは一線を画するように、商品織物として登場したのです。奈良は、ご存知のように古代から有力な社寺が多く、もともと僧衣などの麻布の需要が多かったと推測されます。一五世紀には、麻織物や原料の苧麻の座があったという記述が残っています。こうした歴史的な土壌の上に登場したのが奈良晒だったと思いますが、この奈良晒が奈良の代表的な織物であることを私が知ったのは、奈良の帝塚山大学で織物を教えることになってからしばらく経った30年ほど前のことでした。」

「それから5年ほど経って、今度は不思議な形をした大和機の存在を知りました。奈良晒はそれまでによく知られる存在でしたが、その織物を作る装置の、大和機は全く研究されていませんでした。そのため、25年ほど前から本格的に研究を始めました。」

●その奈良晒は、高度な技術で織られた織物のようですが、織機や技術は、当然アジア大陸との交流の結果としてもたらされたものと推測されます。当時の交易の実際はどのようなものだったのでしょうか。

「靱皮繊維を精製して、細く績んでから織る麻織りは、最も古くかつ最も困難な機織り技術です。それまでも、既に日本には腰機による長い麻織りの歴史があり、奈良晒は、その基盤を元に完成度を高めて、緻密でしなやかで白い、最高度の麻織物として登場したのです。もちろん、中国や朝鮮半島でも麻は古くから織られていて、当然、わが国との技術的な交流はあったと思われますが、残念ながら、その詳細は分かりません。」

「元々、織機の発明と伝播は、今から1万年ほど前に遡ると考えられます。推測は難しいのですが、４０００年～３５００年前頃、文明の中心であった西アジア・地中海地方が寒冷化・乾燥化して、麦作や鉄器などの技術が拡散して中国北部（殷）に影響を与えたことが知られています。おそらく西アジア発祥の織機が世界的に伝播し始めたのもこの頃のことでしょう。他方、それ以前から東アジアには、人体を駆使しての作りをする仕掛けが何万年も前から存在していて、４０００年前頃西アジアの綜統を受け入れてより能率的な仕掛けである腰機が完成します。その頃の東シナ海一帯は、海を介して人々や文化が自在に行き来していたと考えられ、日本へは織物も腰機とともに（同時に）伝わっていたと推測されます。」

●平織用高機も西アジア起源とされていますが、正倉院以降の紋織物との発展経過はどのような形でクロスするのでしょうか。

「高機は、インドを含む西アジアの地機（ground loom）の発展形である穴機（pit loom）と同じ形であり、穴機を室内用に変化させたものであると考えています。正倉院あるいはそれ以前の古墳時代からの日本の紋織は、西アジアから中国北部に伝播し絹用として中国化した、紋織用高機（穴機）を導入して織ったものであると思います。古墳時代からは日本は国家として正式に中国に向き合う必要があり、積極的に中国中枢の文化を導入し、漢織・穴織や呉織などの技術者集団が次々に渡来します。このように、高機は新たに意図的に導入されたのに対して、腰機は、古くから自然に日本に導入されていたと考えています。」

●再度お聞きしますが、そのようなハード（織機など）とソフト（技術）の渡来の歴史があって、大和機や厩機の渡来はどのような形だったのでしょうか。

「大和機は一六世紀末、厩機は一八世紀後半という遅い時期に導入されたもので、この頃には、既に日本の機織り技術は確立していました。ただ庶民の衣料用として（ハードとしての）高機はまだ使っていませんでしたから、少なくとも大和機は現地の技術者が渡来して指導した可能性があります。あるいは、日本人の技術者が現地に赴き、織機の特性を充分理解してその機構を持ち帰った可能性も考えられます。」

「いずれにしても、織機の研究はまだこれからです。後学に期待したいと思います。」

▼編集だより▲

◆あの3・11から「復興元年」が過ぎましたが、伝わることの少なかった、きもの業界での感動的な震災復興への取り組みを知りました。宮城県七ケ浜町の「稲妻呉服店」の店主、稲妻公志さんの話しで、レポートしてくださったのは、当会の常任理事、清田のり子さん。主宰するきもの雑誌「きもの＋」（48号）から抜粋すると◆震災のあったその日から、清田さんはかねて知り合いの稲妻さんの消息が気になって電話を入れますが、繋がりません。知り合いの同業者にも連絡網を広げて、やっと通じた電話で「自宅は流されたが、高台にあった店は無事」を確認。その稲妻さんが「とにかく、店を開けてみよう」と営業を再開したのは3月の末。店主とお客、互いの無事を確かめ合うのが第一で、何もかも流されて、きものどころではない人ばかり。「もう、きものなんかいらないわ」「きものに手を付けるのもイヤ」という率直な感想も漏れます。被災者心理としては判りすぎる程のものでしたが、それでも商売は度外視してでも、何とか塩漬かりのきものを再生して差し上げたい、との思いは強くなる一方。「暫くは、そのまま置いて、もったいないと思ったらそのときに考えましょう」とお客の拒絶にやんわりと再考を促しました◆4月中旬には店に足を運ぶお客が少しずつ増え「きものを何とかしたい」と言う声も起こり始めます。5月の連休前には「きものはもういらない、とお思いかもしれませんが、何とか一生懸命にお手入れします」のDMを出すに至ります。すると塩浸かりのきものが次々に持ち込まれ、店の奥に積みあがったきものの数は、何と千点。この衝撃的な数はきものへの愛着を現して余りあるものでした。「きものへの思いはそんなに簡単に片付くものではなかった」と稲妻さん◆7月（16日）にはお客の発案で「きものでお日本の文化を遊ぶ会」を開催。テーマは「きもの・繋ぐ・そして紡ぐ。遠くから駆けつけた参加者も含めて会場は満員。夜9時のぎりぎりまで歓談が続いたといいます。この感動的な「きもの復興元年」話しは、この秋の「きもの学」で講演予定です。

伝統染織産地実地研修の旅
雪の北越織物〈塩沢・小千谷〉の現場を訪ねて

日本きもの学会の恒例事業となった「伝統染織産地実地研修」も沖縄、加賀（金沢）に続いて今年で三回目。去る2月24日・25日の二日間、北越雪譜の里「塩沢・小千谷産地」の研修旅行が実施されました。夏の高級織物が、雪深い地で、雪の中で織り続けられる不思議。その実際を全身で体感しようと、あえて、雪深いこの時期を選んで訪ねる今回の試みは、これまでの研修旅行とも一味違う内容となって、29名の参加者に深い感銘を与えました。この研修旅行に参加いただいた、当学会の佐々木亮一・事務局長に感想文を寄せていただきました。

3回目となった「伝統染織産地実地研修」参加者の29名

今回の研修は、清田のり子常任理事のコーディネートにより、29名（内会員外7名）が参加して、一泊二日の日程で実施されました。「国境の長いトンネルを抜けると、そこは雪国だった……」ノーベル賞作家、川端康成の誘うような名文句によって、雪国・北越のイメージが膨らんでいますが、われわれが集合した、午後1時の雪国の駅「JR越後湯沢駅」は、この時期には珍しい連日の晴天の中でした。勝手に描いていた、雪国イメージは軽い肩透かしを食らったようですが、それでも、ぐるっと見回すと、道の両側はおよそ2メートルに積みあがった雪の壁が続いています。

早速、貸し切りバスに乗り込み、塩沢織物工業協同組合、三国街道塩沢宿、鈴木牧之記念館、塩沢つむぎ記念館、林織物を順に見学。早くも「北越雪譜」（鈴木牧之著）の世界に浸ることになりました。雪国の暮らしに深く結びついて、不即不離に存在する染織の現場。こつこつと続く手作業の集積や、その果実として、織りあがる反物の輝きは、便利に慣れ親しんだ暮らしを日常とする参加者に様々な思いを刻んだようです。

5時には初日の宿泊場所の六日町温泉「越路荘」に到着しました。5時半から越後上布技術保存協会小河会長、中島副会長、小千谷織物同業協同組合松井理事長、樋口副理事長のご挨拶があった後、和やかな懇親会が開かれました。訪ねる者と迎える者、両者の距離が一気に縮まる場となり、午後8時半には初日の日程を終えることとなりました。

二日目の25日（土）は、午前9時に出発。今日は〝待望の〟小雪模様です。地元の人には、珍しさの欠片もない雪が降る中、小千谷織物同業協同組合が入居する小千谷サンプラザへ向かいました。そして、小千谷織物同業協同組合、樋口織物工藝社、雪晒し、紺仁染織工房と見学して、北越情緒にどっぷりと浸りながら、越後織物が出来上がる作業工程を駆け足で体感しました。少しの心残りを感じながらも、午後3時半、JR長岡駅で現地解散です。限られた日程を最大限生かした有意義な研修旅行だった、と深く納得、関係者の皆様の骨折りに感謝するばかりです。

今思い返すのは、今回の研修旅行が、時折、雪がちらついていたものの好天に恵まれたことはなによりのもので、天の配剤を呼び込んだ29名の研修者の日頃の暮らしぶりが届いたのでしょうか。それに加えて、見学先では何れも懇切丁寧なご説明を戴き、参加者一同は雪深い里ならではの人情に感じ入ったことでした。そして、そこで創られる越後上布、塩沢紬、小千谷縮などは、こうした雪国の暮らしに真摯に向かい合う人々の真直ぐな姿勢とそこから醸し出される魅力を織り込んで出来上がっていることを痛感した次第です。

「きもの学研究」第二集刊行へ

日本きもの学会刊行の「きもの学研究」の第二集の編集作業が急がれていて、近く発刊の運びとなりました。

当学会初のきものに関する論考集「きもの学研究」が創刊されたのが、２０１０年11月。富山弘基「名古屋帯物語」、上林研二「住空間ときもの」、小谷浩之「戦時下の京都のきもの産業」、徳地昭治「私のきもの振興論」――の4氏による4編が収められましたが、第2集では、5氏の5編が発表される予定です。ご期待ください。

「塩沢・小千谷伝統染織実地研修」の旅 2月24・25日に実施

雪になじみ、雪と添い寝して 生み出される雪国の伝統染織

2月24・25の両日、あえて雪深いこの時期を選んで実施された「塩沢・小千谷伝統染織実地研修」の旅。そこには、過去2回の沖縄と加賀（金沢）への研修旅行と異なるなにものかがありました。江戸時代の鈴木牧之が著した「北越雪譜」に見られる、雪に苦戦し、雪と戦い、そして雪になじんでいく暮らし。その暮らしに添い寝するようにして生み出された染織。これら「暮らしの〝芯〟」のような部分は、今も昔も変わらずに存在するのではないでしょうか。ここでは、この研修の旅に参加いただいた、古川美紀さん（一日目）と西岡万紀さん（二日目）から寄せていただいた感想文を紹介します。

雪深い地での織物の成立を〝雪なし県〟に住まう身で考える。

『塩沢・小千谷伝統染織実地研修』一日目

正会員　古川　美紀

会報誌をお読みの皆様には、織りの工程はすでによくご存じと思いますのであえて書きません。私的な感想になりますがご報告させて頂きます。

この日は、塩沢織物工業協同組合で越後上布の製作工程の見学、塩沢つむぎ記念館・鈴木牧之記念館の見学、林織物工房見学でした。私は、以前から塩沢（御召・紬）や麻織物の着心地のファンであったというだけでなく、盛夏や初夏を思わせるサラリとした感触の織物が雪深い土地で真冬に作られるというギャップに何か惹かれるものを感じていました。今回の研修でその魅力の謎に迫れるか、と期待に胸をふくらませ参加をさせて頂きました。

京都から参加したので東海道新幹線で東京駅へ、そして上越新幹線に乗り換え越後湯沢駅で集合、皆さんとバスで塩沢へという旅程でした。文字で書くと単なる場所の移動ですが、プライベートで前日に雨の中をきものでクタクタになっていた時間も含めると、数時間おきに「京都→雨」「東海道新幹線→青空を押しのけ雲から頭を出す富士山を見る」「上越新幹線→長いトンネルを抜けると雪国」「バスの車窓→墨絵のような景色がゆっくりと後ろに流れて積もっている雪と雪空の白が、どこから空と境なく…」なんだか国内でありながら頭は時差ボケのような状態でした。

しかし、塩沢織物工業協同組合に着いてからはスイッチが入りました。青苧を水に浸けて柔らかくしたものを爪で細く裂いて糸にしたものの細いこと！また、その細い糸を撚りながら目にも止まらない早さで繋いでいく凄さ！ 常々、織り上がった反物を扱っていて向こうが透けるように薄いのは知っていても、糸一本の細さに注目して見ていなかった。糸に小さくつなぎ目が見えないか?という目では生地を見たことがなかった！（実際つなぎ目は見えることはほとんどないですが）。どの職人さんの仕事も本に載っている写真で見るより現場で実物を見るというのは、細さ、細かさ、作業の巧みさがよく分かるので、感動がありました。

全てにおいて根気のいる仕事をさらりとした表情で淡々と続けておられる職人さん達を見て、長い冬の閉ざされた世界でコツコツと正確な仕事を積み重ね、素晴らしい出来映えを静かな闘志で競ってこられたのだろうか、とも想像しました。

なぜなら、技術保存協会会長の中島清志様が「かつては技術の習得は生活の為」とおっしゃってましたが「現在は技術の伝承・保持の為」とは違う厳しさがあったであろうと思うからです。

この時、こんなことを思い出しました。ウン十年前、私は競技スキーをしていて冬になれば信州の山にこもり、1月・2月はほとんどお日様を見ない、どんよりとした白銀の中で一日何時間も夕方リフトが止まるまで滑っていました。そして、現地のコーチに「雪無し県の君達には分からない」と何度も言われたものでした。あの時のコーチは、都会から便利なものを持ち込んで1～2ヶ月だけここで過ごしても、この職人さん達のように黙々とトレーニングを積んできた者の滑りと静かに燃える闘志は得られないだろうと言いたかったのか…。黙々と耐えて頑張る尊く長い時間があってこそ、実を結ぶ技術や文化があるのではないかと思い、職人さんとあの時のコーチがだぶって見えたのでした。

もちろん職人さんのこと以前に、1200年も前から雪国の湿度や農閑期の長さが麻織物に最適であったという自然条件があったからです。『気候風土が人を作り、人が生活の中から文化を創る』とは、正にこのことだと思いました。最後に、緻密で根気のいる仕事を淡々と軽々とやってのける雪国の人々の爽やかさは、あの麻や塩沢の織物の着たときの爽やかさに通じるのか、粘り強い物作りへの情熱は真夏の暑さにも負けないものなのかと、私が長く抱いてきた塩沢生まれの織物達への憧れ・魅力の秘密に近づけた気がしました。なんだかひとり嬉しくなって牧之通りを闊歩しました。

雁木の連なる情緒ある町並みは、暖かく微笑んで迎えてくれているように思えました。思えば、大自然が最初に与えてくれた時差ボケの演出があってこそ、自然条件に恵まれた織物のことを肌で感じられたのかも知れません。「大自然に感謝！」素晴らしい一日でした。

夏織物特有の「しぼ」を出す。雪の中での作業に感嘆！

『塩沢・小千谷伝統染織実地研修』二日目

準会員　西岡　万紀

研修二日目の2月25日、朝からこの地方特有らしい水分の多い雪が降るあいにくのお天気になりました。「雪晒し、見られるのかしら～」と、皆さんと心配しながらバスに乗り、六日町から関越道を1時間あまり走って小千谷へ。

夏の新潟には何度か来たことがありますが、その際も、新潟の広さに驚いたものですけど、冬の雪原をみるとまた格別です。しかも今年は大雪！主な自動車道路、歩道は、きれいに除雪されて苦もなく歩けるように整備されてますが、道路わきには2メートルを超える雪の壁が延々と続いてます。家と家の間の細い路地は除雪できずに屋根まで雪に埋もれているなんて所も少なからずありました。ああ～たい へんな事だなあと、実感。めったに雪も降らない関西に住む人間には到底知り得ない風景です。そんな中、まずは小千谷縮ほか、独自の織物を制作されている「樋口織工藝舎」さんへ。

日本工芸会の正会員で作家でもある、樋口隆司さんのお話を伺いながら、たくさんの作品を見せて頂きました。冬の間は雪の湿気が必要な工芸会出品作品の「小千谷縮（苧麻100%・盛夏用）」を織り、他の季節に「湯揉み絹縮（絹100%・単衣・夏用）」「紬ちりめん（絹100%・袷・単衣用）」を制作されているそうです。そして小千谷縮の特徴である「しぼ」を出すための重要な工程「湯揉み」の実演。舟と呼ばれる木製の水槽にぬるま湯を入れて、反物を長いまま入れ押しつけるように、まさに揉み込んで行きます。前日見た塩沢の「湯もみ」とはぜんぜん違うんですね～面白いです！

麻織物は着用時のシワが気になりますよね。シワには霧吹きでたっぷりと水をかけて伸ばすと良い！とは、良く聞くことですが、これも実際に目の前でやって見せてくださいました。暖房の効いた中、麻地は見る間にシワが伸びて乾いていきます。小千谷縮は風を通し、汗を吸収し、すぐに乾き、家で洗える！のが最大の魅力。最近メディアで元祖クールビズだと紹介され、大きな反響があったそうです。私も日本の蒸し暑い夏には日本の麻織物が一番心地よいと実感していますので、より多くの方にその良さを知って頂きたいです。

織物の糊付けに使う海藻の「ふのり」を繋ぎにした「小千谷そば」のお昼を頂いたあと、いよいよ今回の旅のメイン・イベント「雪晒し」の会場へ。

この時点でも雪は止まず…。本来の雪晒しは、晴天の雪上に反物を広げて静かに置いておくだけ。雪上の布は常に乾いていなければいけません。太陽熱で蒸発した雪の水分に強い紫外線があたる事でオゾンが発生し、その酸化作用でさらした布（麻織物に限る）が漂泊されるということです。科学の知識もない昔の人たちがどうして発見したのでしょう?まさに「神の技」ですよね。

この日、会場は「小千谷風船一揆」という気球を飛ばすイベントが行われる予定で、私たちの他にたくさんの観光客の方が来ていました。しかし、雪で中止に。しかし、「せめて雪晒しは見て頂こう」と、決行してくださいました。写真では見たことのある「雪晒し」。実際に広い広い雪原に色とりどりの反物が広げられた風景はほんとうに美しいものでした。はるばるこの雪の時期に来たかいがありました！

雪晒しがその指定の条件になっている「重要無形文化財」クラスの反物は年々少なくなっているそうです。この美しい風景と奇跡のような「神の技」が無くならないことを祈るばかりです。雪晒しを堪能した後、世界一の4尺玉の花火で有名な片貝の紺仁染織工房さんへ。十一代目当主の松井均社長のご案内でまずは藍甕のある作業場へ。こちらで使われる藍は北海道産のもの。一度に180キロもの藍玉を仕込む大きなコンクリート製の藍甕でした。紺仁さんの染めの主なお仕事は型染めでの法被の制作。全国各地からの注文の、面白い絵柄の反物が染められておりました。正藍以外に松煙染めなども手掛けておられます。そして紺仁さんといえば、「片貝木綿」。元々は、柳宗悦の民藝運動の一環として生産が始まったものとか。モダンな色・柄と、普段着木綿としての実用的な着易さが身上の織物は、小さな工房の数台の織り機で、織られていました。織り機の中には、あのトヨタ発祥の「豊田織機」も現役で働いていました。

片貝木綿は若い人たちの間で、手軽に買いやすい反物ということで人気があり、注文に生産が追い付かない状態だそうです。色・柄を工夫して現代人の衣生活のニーズに合った物創りを積極的にされている様子です。新作の綿縮みのへこ帯など、とても面白いなあと感心して思わず買わせて頂きました！

普段着キモノを楽しむ私にとって、小千谷縮や、片貝木綿はかねてよりの愛用品です。その故郷を訪ねて制作の現場を見ることが出来、尚一層の親しみがわいています。今年6月には東京で小千谷・片貝の染織を紹介する大規模な展示会も開かれるそうです。ぜひ多くの皆さんに雪国の魅力的な染織を手に取ってみて頂きたいですね。そして、出来れば着て頂き、その着心地を楽しんで頂きたいなあと思いました。

日本きもの学会の伝統染織を訪ねる実地研修も三回目となりましたが、日本各地で厳しい条件のもと、素晴らしい物作りに励まれる皆さんのお仕事ぶりにいつも敬意と感動を覚えます。どこの産地でも生産の減少・後継者不足のお話を聞きます。日本きもの学会として、これからどんな応援をすればよいのか、そんなことも考えさせられる旅となりました。お世話頂きました関係各位の皆さま、ほんとうにありがとうございました。